

## 能評家・山崎有一郎氏と堀上謙氏の逝去を悼む Mourning for the Death of Two Noh Critics

宗片 邦義  
MUNAKATA Kuniyoshi

---

**Abstract:** The writer mourns for the death of two representative Japanese Noh critics, Yuichiro YAMASAKI (102) and Ken Horigami (85), who have encouraged him for almost 35 years to continue his unprecedented enterprises in Noh adaptation of Shakespeare in English and Japanese. **Keywords:** 山崎有一郎、堀上謙、能評家、シェイクスピア能。

---

20世紀から21世紀にかけての日本の代表的な能評家お二人が本年(2016年)亡くなられた。山崎有一郎氏(1913-2016)と堀上謙氏(1931-2016)である。山崎氏は102歳のご長命であられたが、堀上氏は享年85歳であった。お二人とも能楽評論の第一人者として我が国能楽発展に寄与された、そのご貢献については私がここで述べるまでもないが、わが学会の名誉会員であられたこととも関連して、感謝と追悼の言葉をここで一言述べさせていたきたい。

筆者はこのお二人による長年にわたるご鞭撻と激励によって、これまでの新作能創作研究を続けてこられたと言っても過言ではない。私と同年輩の荒井良雄氏はよきライヴァルで、(シェイクスピアは『ハムレット』の中で“rival”を「仲間」の意味で使っていた)、同氏からたびたびいただく励ましは、また仲間として格別で有難かったが。

山崎氏は、筆者が『英語能ハムレット』を東京神楽坂の矢来能楽堂で初演(1983)して以来、国立能楽堂での再演(85)、そしてその後の英語・日本語シェイクスピア新作能発表の殆どその度ごとに、『能楽タイムズ』や『東京新聞』その他で好意的なご批評を賜り励ましてくださった。『朝日新聞』に長年能評を書いておられたこの長老にご批評いただくことは、新たな分野に猪突猛進していた私にとって大きな励ましであった。

「演技が痛々しい」とか「新作能執筆に励まれた方が」とか、有難いアドバイスもあった。私としては「早く能楽師の方々が英語でもやって下さるといいのですが」などと言いつつ。能評家で英語能についてご批評くださったのは、私が記憶するかぎり、山崎有一郎氏御一人であった。「能楽対談『英語能』(『能楽タイムズ』、1987年5月1日)のお相手の鳴海四郎氏は能楽に造詣深い方であったが、英米演劇の研究者としてご高名であった。

昨年(2015)はじめ国立能楽堂で山崎氏にお会いした時は、私の席が正面のやや後方、山崎氏のお席のすぐ近くで、氏と言葉を交わすことが出来た。「一人で来ましたよ」と。100歳過ぎとはとても思えぬ頗るお元気なお姿であった。つい最近まで横浜能楽堂館長であられた。しかし今年初めにいただいたお葉書にはもうご住所が書いてなかった。励ましの言葉はあったが。

また堀上謙氏は、1990年頃、静岡は三保の松原での薪能でお会いするたびごとに、「あなた

の演っている英語のシェイクスピア能は、日本語にすれば能役者たちが出来る。是非日本語に・・・」と、日本語のシェイクスピア能創作を勧めて下さった。そして観世栄夫氏を紹介して下さった。『能オセロー』台本を読んでもらった観世氏は次に三保でお会いしたときに、「ここまでできあがった台本では、自分はやりにくい」「やるならデズデモーナはヌードで」と言って断られた。

この台本を節付けも殆どそのまま実現して下さったのが、津村禮次郎師（シテ）で、堀上氏は当時『朝日新聞』の能評を担当しておられ、『能オセロー』（95年、宝生能楽堂）は朝日新聞社主催で初演され、作者としては誠に光栄で有難かった。これが能楽師による「シェイクスピア能」本邦初演で、夏目漱石が明治44（1911）年に『朝日新聞』紙上で、「シェイクスピア劇は能・謡曲という別格の音調をもつ象徴劇への翻案」を提唱した、その最初の実現となった。漱石は坪内逍遙の『ハムレット』を観てそう提唱したのだが、『オセロー』で実現された。

この『能オセロー』が大変好評だったので、津村師は続いて拙作の『クレオパトラ』『マクベス』さらにT.S.エリオットの『トマス・ベケット』、イブセンの『二人のノーラ』さらに創作能『ポトマック桜』を初演して下さった。

その後拙作『能ハムレット』日本語版は、シテ・ハムレット伊藤嘉章、ツレ・ホレイシヨ加藤真悟、アイ・墓守野村万作、演出観世栄夫・梅若万三郎・上田邦義で、日大主催でカザルスホールで公演された。また『能リア王』は足立禮子師のシテ・コーデイリアで再演・再再演・再再再演と大好評を得、さらにシェイクスピア没後400年に先駆けて昨年12月8日の『能ロミオとジュリエット』（シテ・ロミオ野村四郎、国立能楽堂）へと続く、これら新作能創作公演へ、当初躊躇していた私を再三励まし説得し意欲をかきたてて下さった大恩人が、堀上謙氏であった。この三十数年を振り返り、私としては感慨無量である。今は氏のあの優しさが懐かしい。『能楽ジャーナル』元編集長として、能楽の未来のための様々な改革案を胸に秘めておられた。

山崎氏、堀上氏、お二人ともわが学会の「世界の文化の調和と融合」そして「平和」のモットーに共鳴して下さり、ご厚情ご鞭撻を賜った。ここに改めて深く感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

上記原稿を書き終えた後、原稿締切日直前の12月28日、『朝日新聞』朝刊が「**芸術祭 大賞**」を報じた。文化庁が27日、今年度の芸術祭賞を発表。7部門の一つ「**演劇部門**」の**大賞**に「**梅若万三郎＝橘香会**」能「**朝長**」と。山崎氏も堀上氏も梅若万三郎師の芸風を以前から、また最近のその深まりを高く評価しておられた。お二人が亡くなられたその年のご受賞となった。生前であったならばどんなに喜ばれたことか。お二人のご遺志が生かされたものと思いたい。  
(2016年12月29日)